

和歌：文苑

著者	終人, 湖村, 花柴
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2 6
ページ	6 5 - 6 7
発行年	1908-06-18
URL	http://hdl.handle.net/2298/6146

靈たまふたつわ

かれぬ、むか——幾萬年。

海は狂ひてびよめきぬ。

はた荒あびなむ——幾萬年。

空のみ星はかゝやきぬ。

はたうるみあむ——幾萬年。

あけぼのや、

空はほてりぬ薄うすくれない紅。

涌は潮の香かみあざりぬ。

あはれこの時白鳥は

歡かひび翔り、たゆたひぬ——

幾秘語いくひごの影とかも。

和歌

終

人

算みだく岩みな爛るふと恐る我心燬く汝が劫の熱 (阿蘇に登りて)

一線を汝はひく我も一線を明けぬ暮れぬも今日も亦ひく

つと白き鷺の鉄筆てんはしり大海を戀ふとつゞけぬ汝にかゝるあゝ

穹窿は世界を蔽ふあゝ苦し逃れんと呼びこゝる終日

異らぬ石二つなくかくこゝろ悲しき今日を又明日に生く

湖

村

草萌ゆる春の大野の青をけて空行く若き心の駒よ

花薔薇咲く日を笑みて語らひし若さにかへれ吾が思ふ人
 散る花のひとつ／＼に胸にしみて涙と凝るや悲しき夕
 相遇ひて言はで別れし春の夜の夢見心の人ふたりかな
 問はざれなそは唯春の夜の夢に相見し人と淋う笑みぬ
 夕月夜大路の群れをかき分けて暗に消ぬぬる裸馬かあ
 さゝあやや春流れゆく水の上に花を敷へぬ物思ふ日と
 あゝ心何に憧れ何もとむ吾れと得わかぬ淋しさに居ぬ
 紅の雲湧く底に戀歌ふ鱒鮫なきや曙の海

花

柴

山の湯は晝ほととぎす青葉かけ晝も蚊帳つる瀧近き室
 ほととぎす啼かぬ夜毎は山の湯に一人端居の月こそよけれ
 美しき姫を盗むと鬼や來る山の辰巳はたゞならぬ雲
 君來ます小町業平皆を來たるまゝこ閉づれば賑はしきかな
 繁り葉に中にかくれてさめ／＼と君かも泣ける五月雨する
 海につゞく五町青田を白鷺が日ごと來て舞ふ五月となりぬ
 わが胸を焔につゞみほ／＼ねます君は優しき惡魔のわん子
 ふる郷は今さつき待つほととぎす青葉に啼かん山かげの家

闇に入る一步一步にたのふきて泣けども君も泣き給へども
 ひな罌粟はあよやかあれどあかくと燃てこそ咲け君に似ぬ花
 南洋は紺青の海、瑠璃の空、眞白羽むれて雲作るあり
 君行けば踵の跡に蝶うまれ息に虹立つ五月野の路
 水はかれて石は火を吐く炎熱に撫子あわぐ夏河原路
 新愁は青葉に埋もる泉めき有りと知られて湧く涙かな
 ともすれば歌は御室に夢は野に飛ぶといみじく憎み給へど。

夏 雜 吟

李

王

茶釜買うて卯月の庵完しや
 磯岩の四月鮑子榮螺の子
 夢を賣りく黄金や卯月庵
 拳大の筆呵する時雷神
 簷頭の瓢落つるや雷神
 眉近く橋あり溪居鮎の飛ぶ
 僧下下山布施懐に鮎買はう

鮎返といふ瀧津瀬や雲暮る
 五月雨林繞山圍の草廬かな
 玉櫛笥新居の疊風薫る
 古書を得て詩僧歸山や閑古鳥
 鶴あさる入江の芦や明易き
 高山大河句に收め得り茂かあ
 庵の茂四壁の書画に眼を曝す
 通路に橋あく卯の花腐かあ

曉

嵐